

【B年】聖霊降臨節第21主日(2023年10月15日)

【福音書日課】

ルカによる福音書 17章20～37節

<sup>20</sup>ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスは答えて言われた。「神の国は、見える形では来ない。<sup>21</sup>『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」<sup>22</sup>それから、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたが、人の子の日を一日だけでも見たいと望む時が来る。しかし、見ることはできないだろう。<sup>23</sup>『見よ、あそこだ』『見よ、ここだ』と人々は言うだろうが、出て行ってはならない。また、その人々の後を追いかけてもいけない。<sup>24</sup>稲妻がひらめいて、大空の端から端へと輝くように、人の子もその日に現れるからである。<sup>25</sup>しかし、人の子はまず必ず、多くの苦しみを受け、今の時代の者たちから排斥されることになっている。<sup>26</sup>ノアの時代にあったようなことが、人の子が現れるときにも起こるだろう。<sup>27</sup>ノアが箱舟に入るその日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだりしていたが、洪水が襲って来て、一人残らず滅ぼしてしまった。<sup>28</sup>ロトの時代にも同じようなことが起こった。人々は食べたり飲んだり、買ったり売ったり、植えたり建てたりしていたが、<sup>29</sup>ロトがソドムから出て行ったその日に、火と硫黄が天から降ってきて、一人残らず滅ぼしてしまった。<sup>30</sup>人の子が現れる日にも、同じことが起こる。<sup>31</sup>その日には、屋上にいる者は、家の中に家財道具があっても、それを取り出そうとして下に降りてはならない。同じように、畑にいる者も帰ってはならない。<sup>32</sup>ロトの妻のことを思い出しなさい。<sup>33</sup>自分の命を生かそうと努める者は、それを失い、それを失う者は、かえって保つのである。<sup>34</sup>言うておくが、その夜一つの寝室に二人の男が寝ていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。<sup>35</sup>二人の女が一緒に白をひいていれば、一人は連れて行かれ、他の一人は残される。」

† <sup>37</sup>そこで弟子たちが、「主よ、それはどこで起こるのですか」と言った。イエスは言われた。「死体のある所には、はげ鷹も集まるものだ。」

【旧約聖書日課】創世記 6章5～8節

<sup>5</sup>主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、<sup>6</sup>地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた。<sup>7</sup>主は言われた。「わたしは人を創造したが、これを地上からぬぐい去ろう。人だけでなく、家畜も這うものも空の鳥も。わたしはこれらを造ったことを後悔する。」<sup>8</sup>しかし、ノアは主の好意を得た。

【使徒書日課】

フィリピの信徒への手紙 1章1～11節

<sup>1</sup>キリスト・イエスの僕であるパウロとテモテから、フィリピにいて、キリスト・イエスに結ばれているすべての聖なる者たち、ならびに監督たちと奉仕者たちへ。<sup>2</sup>わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

<sup>3</sup>わたしは、あなたがたのことを思い起こす度に、わたしの神に感謝し、<sup>4</sup>あなたがた一同のために祈る度に、いつも喜びをもって祈っています。<sup>5</sup>それは、あなたがたが最初の日から今日まで、福音にあずかっているからです。<sup>6</sup>あなたがたの中で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までに、その業を成し遂げてくださると、わたしは確信しています。<sup>7</sup>わたしがあなたがた一同についてこのように考えるのは、当然です。というのは、監禁されているときも、福音を弁明し立証するときも、あなたがた一同のことを、共に恵みにあずかる者と思って、心に留めているからです。<sup>8</sup>わたしが、キリスト・イエスの愛の心で、あなたがた一同のことをどれほど思っているかは、神が証ししてくださいませ。<sup>9</sup>わたしは、こう祈ります。知る力と見抜く力とを身に着けて、あなたがたの愛がますます豊かになり、<sup>10</sup>本当に重要なことを見分けられるように。そして、キリストの日に備えて、清い者、とがめられるところのない者となり、<sup>11</sup>イエス・キリストによって与えられる義の実をあふれるほどに受けて、神の栄光と誉れとをたたえることができるように。

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 創世記 6章5～8節

<sup>5</sup>主は、地上に人の悪がはびこり、その心に計ることが常に悪に傾くのを、<sup>6</sup>地上に人を造ったことを悔やみ、心を痛められた。<sup>7</sup>主は言われた。「私は、創造した人を地の面から消し去る。人をはじめとして、家畜、這うもの、空の鳥までも。私はこれらを造ったことを悔やむ。」<sup>8</sup>だが、ノアは主の目に適う者であった。

## フィリピの信徒への手紙 1章1～11節

<sup>1</sup>キリスト・イエスの僕パウロとテモテから、フィリピにいるキリスト・イエスにあるすべての聖なる者たち、ならびに監督たちと奉仕者たちへ。<sup>2</sup>私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平和があなたがたにありますように。

<sup>3</sup>私は、あなたがたのことを思い起こす度に、私の神に感謝し、<sup>4</sup>あなたがた一同のために祈る度に、いつも喜びをもって祈っています。<sup>5</sup>それは、あなたがたが最初の日から今日に至るまで、福音にあずかっているからです。<sup>6</sup>あなたがたの間で善い業を始められた方が、キリスト・イエスの日までにその業を完成してくださいと、私は確信しています。<sup>7</sup>私があなたがた一同についてこのように考えるのは、当然です。というのは、獄中にいるときも、福音を弁明し立証しているときも、あなたがた一同を、共に恵みにあずかる者と思って心に留めているからです。<sup>8</sup>私が、キリスト・イエスの深い憐れみの中で、あなたがた一同をどれほど思っているかは、神が証ししてくださいます。<sup>9</sup>私は、こう祈ります。あなたがたの愛が、深い知識とあらゆる洞察力を身に着けて、ますます豊かになり、<sup>10</sup>本当に重要なことを見分けることができますように。そして、キリストの日には純粋で責められるところのない者となり、<sup>11</sup>イエス・キリストによって与えられる義の実に満たされて、神を崇め、賛美することができますように。

## ルカによる福音書 17章20～37節

<sup>20</sup>ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので、イエスはお答えになった。「神の国は、観察できるようなしかたでは来ない。<sup>21</sup>『ここにある』とか、『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの中にある〔別訳→手中にある〕からだ。」<sup>22</sup>それから、イエスは弟子たちに言われた。「あなたがたが、人の子の日を一日だけでも見たいと望む時がある。しかし、見ることはできない。<sup>23</sup>『そら、あそこに』『そら、ここに』と人々は言うだろうが、出て行ってはならない。また、追いかけてもならない。<sup>24</sup>稲妻がひらめいて、大空の端から端へと輝くように、人の子もその日に現れるからである。<sup>25</sup>しかし、人の子はまず多くの苦しみを受け、今の時代から排斥されなければならない。<sup>26</sup>ノアの時にあったようなことが、人の子の時にも起こるだろう。<sup>27</sup>ノアが箱舟に入る日まで、人々は食べたり飲んだり、めとったり嫁いだり〔別訳→嫁がせたり〕していたが、洪水が来て、一人残らず滅ぼしてしまった。<sup>28</sup>ロトの時に同じようなことが起こった。人々は食べたり飲んだり、買ったり売ったり、植えたり建てたりしていたが、<sup>29</sup>ロトがソドムから出て行った日に、火と硫黄が天から降って来て、一人残らず滅ぼしてしまった。<sup>30</sup>人の子が現れる日にも、同じことが起こる。<sup>31</sup>その日には、屋上にいる者は、家に家財道具があっても、取り出そうとして下に降りてはならない。同じように、畑にいる者も戻ってはならない。<sup>32</sup>ロトの妻のことを思い出さない。<sup>33</sup>自分の命を救おうと努める者は、それを失い、それを失う者は、命を保つのである。<sup>34</sup>言うておくが、その夜一つの寝床に二人の人が寝ていれば、一人は取られ、他の一人は残される。<sup>35</sup>二人の女が一緒に臼を挽いていれば、一人は取られ、他の一人は残される。」<sup>37</sup>そこで弟子たちが、「主よ、それはどこですか」と言った。イエスは言われた。「死体のある所には、禿鷹も集まるものだ。」

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・10月15日「聖霊降臨節第21主日」の日課主題は「審きの日」。

・旧約聖書日課は、「創世記」から、「ノアの洪水物語」の導入句の一部。使徒書日課は、「フィリピの信徒への手紙」から、冒頭の挨拶と祈りの句の箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、エルサレムに上られる途上で立ち寄られた村で同行してきた者たちに語られた教えを伝える場面の一部。

**旧約日課(創世記6章より)**

・「創世記」は、「聖書」全体の第一巻、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「律法」全五巻の第一巻。第二巻「出エジプト記」が「モーセ物語」として語り始め、正典「前の預言者」全四巻に至るまで構成される「イスラエル正史物語」の前史物語と位置づけられる。形式上、「創世記」と「出エジプト記」は接続されているが、両書の物語が設定する時代には400年の断絶があり、歴史物語としては明確な隔絶がある。「創世記」が扱うのは、「天地創造」から始まり「人類の全地展開」に至るまでの「原初の物語(原初史)」(1～11章)と、「イスラエル正史」に登場するイスラエルおよび周辺諸民族の共通の祖とみなされる伝説的な族長たちの物語(12～50章)である。「原初の物語(原初史)」は、古代オリエント世界、特にメソポタミア文化の中で共通に伝承されてきた古い神話群を下敷きに、後に続く物語と整合性を持つように編集されたものとして展開されている。「族長物語」は、アブラハム、イサク、ヤコブおよびヤコブの息子らまでを四世代の家族の物語として綴るが、物語構成としては、「族長アブラハムの物語」(12～25章)と「族長ヤコブの物語」(25～50章)の二部で構成されている。

・日課箇所は、「原初の物語(原初史)」の中で大部を占める「ノアの洪水物語」の冒頭導入部の一部。「ノアの洪水物語」は、ここから9章まで続く。古代オリエント世界では、広く「洪水伝説」が伝えられていたが、その起源は、シュメール神話の洪水物語にあるとされる。この洪水物語は、紀元前27世紀ごろのウル第1王朝第5代王として知られる伝説的な英雄「ギルガメシュ」の名を冠して伝えられる「ギルガメシュ叙事詩」の中でも取り上げられている。「ノアの洪水物語」の基本構成は、このシュメール神話の洪水物語と一致しているが、「聖書」の神観に基づいて編集されている。シュメールから始まるメソポタミア文明は、大河チグリス・ユーフラテス流域で発展し、そこから得る灌漑で農業を発展させたが、日常的な洪水にも悩まされていた。他方、「ユダ・イスラエル」は丘陵・山岳地帯に形成された社会であり、「洪水」は必ずしも身近な出来事ではなかったはずである。シュメール神話の洪水物語に比して「ノアの洪水物語」が非常に長期にわたる洪水として描かれるのには、そのような背景が考えられる。

・5節7節「後悔し(ナーハム)」は、「慰める」とも訳され、「ノア」の名の意味として説明されている(5:29)。語義は「同情する／共に苦しむ」というニュアンス。預言書「ナホム書」の「ナホム」は、この語に基づく名。

**使徒書日課(フィリピ1書)**

・「フィリピの信徒への手紙」は、「パウロ書簡集」の6番目に置かれた書簡文書。パウロがバルナバ宣教団から独立して自らの宣教団を組織して赴いたマケドニア伝道で最初に取り組んだのがフィリピでの伝道だったとされる(使徒16章)。「使徒言行録」によると、フィリピには当時、ユダヤ人の会堂が成立しておらず、パウロは川岸で安息日の祈りを共にするユダヤ人の集まりに赴いて伝道し、紫布の商人であった女性リディアとその家族を最初のキリスト信者とする教会を立ち上げるようになった。当地での宣教活動は短期間で終えなければならなかったようで、パウロがどこまで直接、教会形成に携わったかは不明であるが、その後のパウロの宣教活動を経済的に支える主要な共同体になったと考えられる(フィリ4:10以下、Ⅱコリ11:8～9など参照)。本書簡は、パウロがいずれかの場所で当局者によって監禁された状態で記したものとされるが(フィリ1:13)、詳細は不明。本書簡の成り立ちについて、元来は複数の書簡であったものを編集して一編にしたとする説を取る学者がいるが、現在の本文が書簡としての体裁を完結しており、敢えて複数書簡説に基づいて解釈する必要はない。

・本書簡の宛先は、「フィリピにいて、キリスト・イエスに結ばれているすべての聖なる者たち、ならびに監督たちと奉仕者たちへ」とあり、他の書簡では見られない「監督たちと奉仕者たち」という役職者名が付されている。「監督(エписコポス)」は、「新約」中で5例が知られるが、教会管理者としての職務に明確に位置付けていると考えられるのは2例(Ⅰテモ3:2、テト1:7)のみであり、他の2例(使徒20:28、Ⅰペト2:25。いずれも単数形)は一般的な「監督者」という意味で用いられている。日課箇所の「監督たち」は複数形であり、後代の教会に職制として確立した「監督職」と同等のものを指しているわけではななかもしれない。しかし、並べて挙げられている「奉仕者(ディアコノス)」は、「テモテへの手紙」3章で「監督」と並べて挙げられる役職でもあることから、このフィリピの教会共同体で立てられていたと考えられる「監督」と「奉仕者」という役職が、後代の「監督職」や「奉仕者職」の原型になった可能性はある。「奉仕者」は、「パウロ書簡集」中で19例見られ、役職名かどうかは別にして広くパウロの関わる教会共同体で用いられていた用語であったことは確かである。

・日課箇所に頻出する「キリスト・イエス」という表現は、「パウロ書簡集」では広く用いられており、敢えて「イエス・キリスト」と異なる表現を用いることで何らかの意図を示しているとは必ずしも言えない。

・6 節「キリスト・イエスの日」、10 節「キリストの日」は、2:16「キリストの日」と共に、本書簡に特徴的な表現として注目される。「パウロ書簡集」で同様の表現は、I コリ 1:8「主イエス・キリストの日」のほか、「主の日」(I コリ 5:5、I テサ 5:2,4、II テサ 2:2)という表現がある。これらの表現は、「パウロ書簡集」以外では、「主の日」の 2 例 (II ペト 3:10、黙 1:10)、また類例としては「人の子の日」(ルカ 17:22)のみである。「キリスト・イエスの日」は「キリストの日」と同義と見ることができ、  
「主の日」を同義語と見ることができ、注意が必要である。パウロの用法では、「主の日」は明確に「終末における復活と審判」というユダヤ教(ファリサイ派)と共有する復活信仰に基づいた理解で用いられているし、「パウロ書簡集」以外の用例も同様である。「キリストの日」は、この「主の日」の理解を前提としているのは確かであるし、「主の日」を「キリストが再臨」されるという神学(I テサ 4:15)に基づいて発展させた表現であると考えることができる。ただし、パウロは、初期(「テサロニケの信徒への手紙一」執筆時)に抱いていた近い将来に起こるだろうという終末観を、後期には徐々に修正し、終末自体は遠い将来に設定しながら、なお「主の日」に対する待望を切迫したものとして受けとめるために、「キリストの日」という新しい表現を用いるようになったとも考えられる。実際、本書簡でパウロは、すぐには到来しない「主の日」への安易な期待に頼らず、地上の生涯の中でなお、キリストとの霊的一体性を実感しながら生涯をまっとうしようとする姿勢を、自らの体験をもとに説いているのである。

### 福音書日課(ルカ 17 章より)

・日課箇所は、エルサレムへ向かう途上の村で皮膚病患者 10 人を癒した逸話場面が続く設定で、ファリサイ派の人々からの問いに主イエスが答えられた教えとして記されている。皮膚病患者が癒された場面の村は、「サマリアとガリラヤの間」(17:11)とされており、さらに皮膚病患者の一人は「サマリア人」だったとされており、サマリア人に批判的なファリサイ派の人々に向けて、サマリア人の信仰をどのように考えるべきかという視座を伴いながら教えられたものとして、「ルカ福音書」は日課箇所を位置づけようとしていると考えられる。

・ファリサイ派の問い「神の国はいつ来るのか」に対して、主イエスの答えは、その「時」ではなく、「様式」や「場所」の問いに言い換えており、問いと答えが必ずしもかみ合っていない。しかし、「実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」と現在形で答えることによって、「いつ」という「時」についても答えたものとなっている。  
・この「あなたがたの間に(エントス・ヒュモーン)」(21 節)は、用例の少ない表現で、翻訳上の困難が知られる。唯一知られる「新約」中の用例はマタイ 23:26「杯の内側を(テントス・トゥ・ポテーリウ)」で、この用例に倣えば「あなたがたの内側に」となり、人の内面を指す意味となるが、必ずしも明確ではない。

・22 節以下で展開される教えは、「人の子の日」(22 節)、「その日」(24 節、27 節)、「人の子が現れる日」(30 節)などの用語と共に、「終末における復活と審判」に際して再臨する者のあることが述べられている。通常、この「人の子」は、主イエスその人を指して言われていると解される。しかし、このような終末の再臨を主イエスが自身のこととして述べられたということに対して、懐疑的な見方をする者もある。「人の子」は、通常、「ダニエル書」が描く終末に來臨する者(ダニ 7:13)と解されるが、「新約」でも「旧約」でも、「人の子」の用例には、「神の子」の対義として単に「人間」を意味する用法で用いられるものもある。

### 来週の誕生日 (10 月 15 日～21 日)

#### 主日礼拝の讚美歌から

- ・21-208 番「主なる神よ、夜は去りぬ」(= I 24「父のかみよ、夜は去りて」)は、10 世紀にさかのぼるラテン語聖歌で、従来、6 世紀末の教皇大グレゴリウスの作とされていた。曲は、17 世紀フランスの聖歌集所収の曲を転用。
- ・21-507 番「主に従うことは」は、19-20 世紀米国メソジスト派牧師グラント・タラーの作詞作曲。孤児として育ち学校教育をほとんど受けないまま 19 歳で牧師になり、ソングリーダーとしても活動。日本語版は、1923 年版『日曜学校讚美歌』から継承。
- ・21-412 番「昔、主イエスの」(= I 234)は、20 世紀日本を代表する讚美歌学者で牧師の由木康が 1931 年版『讚美歌』編纂時に、社会的視点を持った讚美歌を補うために作詞。

#### 21-208「主なる神よ、夜は去りぬ」

#### Nocte surgentes vigilemus omnes

1. Nocte surgentes vigilemus omnes, / semper in psalmis meditemur atque / viribus totis Domino canamus / dulciter hymnos,
2. Ut, pio regi pariter canentes, / cum suis sanctis mereamur aulam / ingredi caeli, simul et beatam / ducere vitam.
3. Praestet hoc nobis Deitas beata / Patris ac Nati, pariterque Sancti / Spiritus, cuius resonat per omnem / gloria mundum. Amen.

#### 21-507「主に従うことは」

#### In his steps I follow

1. "In His steps" I follow as I go / On my pilgrim journey here below, / "In His steps" I follow day by day, / Trusting Him to lead the way.  
[Chorus] Gladly in His steps I follow I follow I follow, / Gladly in His steps I follow, / Gladly in His steps I go.
2. "In His steps," what peace and joy I know, / Every day my path doth brighter grow, / "In His steps" His spirit dwells within, / Cleansing me from every sin. [Chorus]
3. "In His steps," I prove His matchless love, / While He leads me to my home above, / "In His steps" tho, pressed by every foe, / I shall conquer all, I know. [Chorus]
4. "In His steps!" how sweet to walk with Him, / Even tho, clouds my pathway often dim, / "In His steps" His smile illumines the way, / And my night is turned to day. [Chorus]